【51】

氏名（本籍）	飯田順子（千葉県）
学位の種類	博　士（心理学）
学位記番号	博甲第3034号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	中学生の学校生活スキルに関する研究

主査	筑波大学教授	Ph．D．	石隈利紀
副査	筑波大学教授	医学博士	小川俊樹
副査	筑波大学助教授	博士（心理学）	庄司一子
副査	筑波大学助教授	博士（心理学）	濱口佳和

論文の内容の要旨

本研究の目的は，①中学生の学校生活スキルの個人差を測定する尺度を作成すること，②中学生の学校生活スキルとその他心理学変数との関連を検討し，学校生活スキルの役割・機能について検討すること，③学校生活スキルに焦点を当てたスキルトレーニングを中学1年生の小集団・学級集団を対象に実施し，プログラムの作成方法，効果の測定方法，進行上の留意点について検討することであった。

1．中学校の学校生活スキルを測定する尺度の開発（研究1～研究3）

研究1では欧米で行われたスキル尺度開発に関する研究について文献研究を行い，学校生活スキルの枠組みを用いて中学生の学校生活スキルをとらえる妥当性について確認した。研究2では，LSDS-B（Darden et al., 1996）を参考にすると同時に，中学校教師を対象とした半構造的面接および中学生を対象とした自由記述調査を実施し，学校生活スキル尺度のための項目を収集・選定した。研究3では，研究2で収集・選定された項目を基に学校生活スキル尺度（中学生版）を開発し，中学生809名を対象に，その信頼性・妥当性を検討した。その結果学校生活スキル尺度（中学生版）は，『自己学習スキル』，『進路決定スキル』，『集団活動スキル』，『健康維持スキル』，『同輩とのコミュニケーションスキル』という5つの下位尺度に分かれた。次に学校生活スキル尺度（中学生版）の信頼性と構成概念妥当性を検討し，信頼性と妥当性が支持された。

2．中学生の学校生活スキルとその他の心理学的変数の関連（研究4～研究7）

研究4では，調査1（中学生604名対象），調査2（中学生730名対象）を通して，学校生活スキルが自己評価（自尊感情・自己効力感）に与える影響について検討し，自己評価には同輩とのコミュニケーションスキルの影響が強いことから明らかになった。研究5では，中学生128名を対象とした調査で，学校生活スキルが学業成績に与える影響について検討し，学業成績には自己学習スキル（特に学習習慣の維持に関わるスキル）の影響が強いことが明らかになった。また学校生活スキルが学業成績に与える影響は，教科の特色によっても異なることが示された。研究6では，中学生240名を対象とした調査で，学校生活スキルが学校ストレスに与える影響について検討し，学校生活スキルはストレッサーの認知・コーピング・ストレス反応のいずれの段階にも特定の影響を与えることが示された。

3．学校生活スキルに焦点を当てたスキルトレーニングプログラムの開発と実践（研究８～研究９）

研究８では，小集団（中学生１年生６名のグループ，２グループ）を対象に（進路決定スキルの一つである）意思決定スキルに焦点を当てたスキルトレーニングを実施した。プログラムの作成方法について，プログラムが生徒に肯定的に受けいれられていたこととターゲットスキルがある程度学習されたことが示されたことから，今回用いたプログラムの作成方法が支持された。効果の測定方法について，学校生活スキル尺度は生徒の自己のスキルの認知の変化を測定し，スキルテストは行動面の変化に関する情報を提供していることから，相補的に活用することが望ましいことが示唆された。研究９では，学級集団（中学１年生２クラス）を対象に（健康維持スキルの一つである）ストレス対処スキルに焦点を当てたスキルトレーニングを実施した。生徒の自由記述において，集団生活が楽しかったという内容と学習内容がわかりやすかった･役に立ったという内容が得られたことから，コーチング法とグループ活動の技法を組み合わせたプログラムが支持された。プログラムの効果の測定方法について，各測定方法は効果を測定する上で異なる役割を担っており，組み合わせて実施することが望ましいことが示された。

4．本研究の理論的貢献，実践的貢献

本研究の理論的貢献として，①中学生の「学校生活スキル」を提唱したこと，②学校生活スキルの構造が，学校心理学の学習面，心理・社会面，進路面，健康面に概ね対応しており，学校心理学の枠組みを支持したこと，③学校心理学における児童生徒の援助ニーズに応じる三段階の援助サービスのモデルのなかで，学校生活スキルのトレーニングという方法の意義について論じたことがあげられる。

また本研究の実践的貢献は，①中学生の学校生活スキル尺度の開発により，中学生自身が自分の行動を見直すリストを提供するとともに，教師が生徒のスキルを把握するリストを提供する，②学校生活スキルが生徒の自尊感情や適応へおよぼす影響について検討したことにより，生徒の学校適応の促進のための援助の実施の際の焦点に関する情報を提供することである。

審査の結果の要旨

本研究は，中学生の学校生活での適応の要因として「学校生活スキル」を概念化し，その尺度を開発した。子どもの学校生活への援助サービスを検討するとき，さまざまな方法が議論されるが，子どものどのような成長と結びついているか不明であることが多い。本研究で，学校生活スキルを提唱し，その尺度を開発することにより，授業などを通した援助サービスで具体的な子どものスキルの向上をとりあげることが可能にした。また本研究では，学校生活スキルと自尊感情や適応などとの関連を検討したことにより，具体的な学校生活で苦戦している子どもへの援助サービスの焦点をも明らかにしたことも評価できる。さらに，本研究は，子どもが学校生活を通して成長することを援助するサービスの学問体系である学校心理学に，学校生活スキルという概念を加えることにより，学校心理学の発展に寄与するものである。

以上のように本論文は，心理学の領域におけるいくつかの新知見を得たものと認めることができるが，一部に尺度の項目の表現に不適切な部分があることやスキルトレーニングの結果の検討に不十分なとことがあることが指摘できる。本論文はこのような今後さらに追及されるべき課題を残してはいるものの，中学校の学校生活スキルという概念を提案し，その尺度を開発し，スキルトレーニングの作成と実施について提案したことは，十分評価できる。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。